

アン・ファイン著 *Flour Babies* に見る自己発見の意義

稲 田 依 久

A Meaning of Selfawareness: A Study of *Flour Babies* by Anne Fine

Iku Inada

抄 録

アン・ファインが *Flour Babies* で描き出す家族は、これまでの通念では変則と言われるような父親の失踪の結果の母子家庭である。その家庭に育った男子中学生は体格が良く、サッカーチームに属し、学校では問題視される成績不良の生徒である。この物語は、中学生が小麦粉袋を赤ちゃんに見立てて世話をするという学校のプロジェクトを遂行する過程において、赤ちゃんに対する親のありかた、教師に対する生徒のありかた、彼の両親のありかたを看破するなかで自らの生き方を模索する過程を描いたものである。彼の心の成長の軌跡を辿ることで、アン・ファインが描き出す自己発見の意義を考察する。

キーワード：児童文学、自己発見、生徒／教師

(2004年9月30日 受理)

Abstract

Anne Fine describes a junior-high student in a single-parent family in her work *Flour Babies*. This paper discusses the importance of acquiring self-awareness.

Key words: Children's Literature, Self-awareness, Students/Teachers

(Received September 30, 2004)

1.

家庭の崩壊、家族の絆の喪失が言われて久しい。破綻した家庭や絆を失った家族が引き起こすことになる問題の多様化・陰惨化、またこれまでの通念から見て外見上は何の問題もないかのような家庭や家族成員の内部崩壊の深刻さは、昨今の社会問題に明らかである。家庭や家族が新たに定義されることなくして現在の個人の生き方と家庭や家族との接点を見極めることは困難な状況まで至っていると思われる。このような状況に身を置く子供達にとって何らかの示唆を与える可能性のある作品として、アン・ファイン著 *Flour Babies* (初出1992年) をあげたい。これはこれまでの通念で判断する限りでは変則的な家庭生活、即ち父親の失踪による母子家庭の生活を余儀無くされている男子中学生の物語である。ここに描かれた中学生は独自の方法で親とはどのような存在なのか、生徒はどうあるべきなのかを自ら再定義することで、また失踪した父親の生き方を理解することで、独自の生き方を選びとる端緒につくのである。彼の模索の跡を辿りながらアン・ファインが呈示しようとしている自己発見の意義を探ることとする。

2.

Flour Babies の舞台はアメリカ合衆国の中西部にあると思しい町のとある中学校である。(場所は限定できないのであるが、主人公である中学生サイモン・マーティンの父親が失踪した折、シカゴ行きのバスに乗ったに違いないという箇所から、また話し言葉に地方を限定できるような特徴がないことから、上記のように推察する。) 新年度が始まったばかりの学校で、「Room 8」と名付けられた成績不良で「脳に損傷のあるブヨ」(5) のようだと言われるような生徒ばかりを集めた学級が、3週間にわたる科学の特別プロジェクトを行うこととなり、そのテーマを投票で選ぶことになる。校長と思しいデイヴォイ博士が呈示したテーマは、被服、栄養、家庭経営、児童の発達成長、消費者研究といった、いずれも科学もしくは理科というよりは家庭科のプロジェクトというほうがふさわしいような項目で、「Room 8」の男子生徒達の気に入るものではなかった。が是非ともテーマを選ばねばならず、授業に遅刻してきたサイモンが、既に投票された用紙から無作為に1枚を選んで19人の男子生徒からなる「Room 8」のプロジェクトを決定する役目を仰せつかる。しかして彼が選んだ投票用紙に書かれていたのは、「児童の発達成長」であり、ここから「Room 8」の生徒達の *flour babies* 即ち小麦粉の入った袋(6ポンドの小麦粉が入った黄麻布の袋を赤ちゃんに見立てて世話をするというのが「児童の発達成長」プロジェクトの内容である)の世話をする3週間が始まるのである。しかもその世話の仕方には5項目の規則があり、その要旨は、1. 清潔にかつ乾燥させておくこと、2. 週に2回秤にかけて重量を測定する、3. 昼夜絶えず目の届くところに置いておくこと、4. 育児日誌を毎日3文以上書くこと、5. プロジェクトが終了するまで氏名は明らかにしないが、小麦粉袋の赤ちゃんの福利を監視する人物において、上記の規則が守られているかどうかを確認する、というものである。

物語は主人公であるサイモンが担当することになった小麦粉袋の赤ちゃんの世話をしていく過程を、他の生徒達の様子と比較するかたちで展開する。サイモンが赤ちゃんに見立てた小麦粉袋の世話・管理をするなかで、赤ちゃんの世話をすることがどのようなものなのかについて学ぶと同時に、彼の母親の愛情や失踪した父親について、そしてなによりも彼自身について多くを発見することが物語の核心である。それゆえここでは「Room 8」の他の18人の生徒達の様子については詳細に触れずに、サイモンの3週間にわたる自己発見の軌跡を辿ることとする。

「児童の発達成長」プロジェクトの目的は、提案者であるデヴィョイ博士によると、親子関係の実験であり、小麦粉袋を3週間、責任をもって世話をし、日誌をつけることで問題点に気付いたり、生徒が自分の取り組み姿勢を反省し、生徒が自分自身について学び、また親の役割はどのようなものかについて学ぶ機会を与える (21) というものである。しかしてサイモンには、フリルのついた白いボンネットをかぶり、エプロンドレスを着、丸い目とまつげが描かれた黄麻布の小麦粉袋が割り当てられる(33)。この時点でのサイモンは小麦粉袋の世話にはさして興味がなく、むしろ教員室の外で教員達の話を読み聞きして耳にした情報、即ち「Room 8」担当のキャシディ先生の危惧からの言葉、生徒達が小麦粉袋を破った時に生じるであろう「袋の大爆発による小麦粉の散乱」(20)、をプロジェクトの最後には生徒達が袋を蹴破ることが許可される、と誤解しての「大爆発」を自分達が行うことがサイモンの目的であった。いずれにもせよサイモンが小麦粉袋赤ちゃんを手にした当初は、赤ちゃんを呼ぶ際に英語での通常の対処の仕方として物扱いをして非人称の代名詞「it」で小麦粉袋を指していた (32) のであるが、彼の母親から小麦粉袋の様子から見て女の子なのだから「her」と呼ぶべきだ (32) という提言があって、サイモンも小麦粉袋を女性の赤ちゃんとみなし始める。ここにはシニフィアン-シニフィエ、ラング-パロールの関係、即ち名付けること-名付けられるものの関連がもたらすところの人格的関係の樹立がある。代名詞を選ぶという言語活動が、代名詞で指されている対象との関係の結び方を示しているのである。サイモンは母親の指摘によって、小麦粉袋に人格を見出す端緒についたのである。

この後のサイモンの小麦粉袋への関わり方は、彼自身には小麦粉袋を人格を有した存在として認めるという明確な自覚は未だないのであるが、小麦粉袋に対して注意深さと愛着を増す方向へと向かい始める。例えば、級友の一人が小麦粉袋を交換してほしいとサイモンに言った時、サイモンは躊躇無く「この子は僕のだ」(33) と返答する。またクラスの机が2つ続きの物で、隣の席には消しゴムのカスをためる癖のある生徒が坐っているので小麦粉袋を机にのせると汚れると察知したサイモンは、隣の席の生徒に机をきれいにするように注意し、汚れないように注意深く小麦粉袋を机にのせるのである (35)。級友達はこのようなサイモンに対して「マーティンお婆さん」、「サイムママ」といったあだ名をつけて (35) からかい、サイモンの頭を壁に打ちつけて怪我をさせるのである。この時もサイモンは、血が出た手を小麦粉袋ではなく、自分のシャツで拭うことで小麦粉袋を汚すまいとするのである (36)。小麦粉袋を汚すまいとするサイモンの努力は更に続き、サッカーの

練習に小麦粉袋を伴って行き、チームの皆に見られないような置き場所を探している時、級友の一人が自分の小麦粉袋をトイレのタンクパイプの上に置こうとした折、サイモンはそこがきれいかどうかを指で確かめ、「汚いじゃないか、拭かなくちゃ」(48)と注意深いところをみせる。更に練習に遅れると罰則の追加練習が課せられるにも関わらず、サイモンは小麦粉袋が汚れない置き場所をさがし続け、小麦粉袋には「一緒に行こうな、外でどこかいい所に坐ろうな」(49)と呼びかけて、「ゴールの数ヤード後ろにある陽の当たっている茂みに、タオルにしか見えないようにと願いながら」(49)彼自身の小麦粉袋を規則にある通り、目の届く所で安全に清潔に保てる所(50)に置くのである。ここには小麦粉袋を人間の赤ちゃんに等しい存在と認識したサイモンが、小麦粉袋を大切に扱おうとしている意図が見て取れる。がサイモンには当初の誤解、即ちプロジェクトの最後に生徒達がそれぞれの小麦粉袋を蹴破る「大爆発」という愉快的結末を実現させたい、という最終目的があり、そのためにはとにかく袋を大切にしなければならない(50)という意図も働いており、サイモンの裡では次元の異なる二つの意図が併存しているのである。

このようなサイモンではあるが、小麦粉袋の世話という具体的な仕事をするなかで赤ちゃんという存在が人にとってどのようなものであるかを徐々に認識し始める。例えばサッカーの練習中に小麦粉袋の存在が気になって(54)、かつてないことであるが、集中してプレーができない(55、56)自分に気付く。この気付きは普遍化されて、親である人が赤ちゃんの乗った乳母車を店の外に置いた時にどう感じるのか(56)という推測につながり、親たるもの赤ちゃんが気になって慌てて買い物を買わせたり、エスカレーターや入り口で他の客にぶつかるにも関わらず乳母車をもって入ってくる理由に思い至るのである(56)。しかしてサイモンは育児日誌第一日に以下のような感想を記す——親の義務は多大であることに気付いたこと、自分の子供時代の成長について学んだこと、父親がサイモンの生後六週間即ち1008時間後に失踪したこと、母親は122,650時間(14年間)もサイモンの世話をし続けていることを再認識したこと(65)。日誌の第二日には、犬の唾液が不潔であること、それゆえ赤ちゃんには予防接種が必要であることに気付いたことを記している。親たるものが赤ちゃんである自分の子供に対してどれほどの配慮をするものなのか、赤ちゃんは安全面・衛生面で注意深く世話をしなければならない存在であること、親は赤ちゃんに対して多大な責任と義務を負っていること、そしてその責任と義務は親にとって大変な努力であること、にサイモンは思い至っているのである。この育児日誌はペスタロッチの「育児日記」を想起させるものである。ペスタロッチの「育児日記」の伝えるところは、人類すべてを救おうと志したのであるが、実際に彼が長子を授かって育てる際に、一人の人間の魂が救われるということがいかに厳なことであるか、また自分自身がいかに無力であるかを体験することになった¹⁾、というものである。サイモン達が書く事になった育児日誌にも、同様の意味が付されていると考えてもよいと思われる。

サイモンが小麦粉袋の世話をする体験から上記のような事柄に自ら気が付いたことを教員室でデイヴォイ博士は大いに評価し、その言葉を盗み聞きしたサイモンは、これまで誉められたことが少なかつただけに、このようなことがおきたことで自分自身を誇らしく思

う(66)のである。この誉められた体験が「Room 8」の常連生徒であるサイモンに及ぼした影響は劇的である。先ずこれまで「もう少し頑張らなかつたことを生まれて初めて悔い」ている(67)。しかしながらこの時点では彼はまだそれまでと変わらぬ成績不良の「Room 8」の常連生徒であり、居残り室に行くのに「時間通りに行って評判を落とさぬ為に」(69)時間つぶしをするべくラジエーターの上に積み上げられた「Room 8」の他の生徒達の育児日誌をパラパラめくるのである。がこの時間つぶしのための行動が、先の後悔を更に昇華させることにつながるのである。即ちもう少し頑張ることとは、単に誉められるためでもなく、義務を果たすだけでもなく、生徒の教育に情熱を傾けて生きている教師に同じ情熱を以て向き合うことである、と自覚するに至るのである。それは義務だからとやっつけ仕事で宿題の日誌を書いた生徒のおざなりな日誌を読んで、サイモン自身が小麦粉袋に対して抱いている愛着・責任感と、また世話をすることで彼自身が気付いたことと比較して、「教師が最小限のことしかしない生徒達を叱る理由が分かった」(69)、また教師が教育に対する「気概、強靱な心、強い決意を持続させている」(69)ことへの賞賛、しかしながら教師が生徒達から与えられるのは感謝ではなく無礼なしうちであることに「愕然とする」(70)のである。この新しい認識はサイモンをしてまるでこれまでとは別人であるかのような行動をとらせる。それはサイモンを誉めたディヴォイ博士の言葉、「居残りも役に立つ」(70)を実行しようという決意による行動で、居残り室でいつものようにふざけもせず、わき目もふらずに育児日誌第四日を認める(73)、というものである。ここにサイモンは生徒としての自分のありかたを新たに選び採ったのである。それは強制されての学習ではなく、何らかの功利的な目的のための学習でもなく、生徒という人間存在に対して気概と情熱とをもって相対そうとする教師という人間に應える方法として学習を捉えるという認識に基づいた自発的行動であり、生き方である。しかもこれはサイモンの内的変化であるがゆえに、かつてサイモンの国語クラスを二年間教えたことがある居残り室の担当教員であるアーノット先生の目には、彼に変化をもたらした理由は謎のままであり、彼女は「誰が、何が彼にそうさせたのか」(73)という疑問を抱くのである。また彼女にはサイモンの変化は単に学業に関するものしか映っていないのである(78)。人の内的変化は以上のように劇的であり、一に個人的な出来事なのである。しかもこれは「主体的にみずから生きる投企」²、「実存は本質に先立つ」³生き方そのものである。しかしてこのような視点を得たサイモンは、彼の存在が実存であること、即ち「自分をアンガジェし、自分は自分がかくあろうと選ぶところのものであるのみならず、自分自身と同時に全人類をも選ぶ立法者であることを理解する人は、全面的な、かつ深刻な責任感をのがれることはできない」⁴という生き方を実践し始める。サイモンはこの内的変化の意味を明確にはつかんでいないのであるが、この体験は彼にとって「新しく生まれ変わった」(79)と感じられる変化であった。その居残り室での40分は「過ぎてしまったのが残念」(80)に思えるものであり、「本を読んでいて、終わりまで読んでしまってもう後がなくなった、というのと同じ気持ち」(80)であるという認識をサイモンにもたらす。そしてこの認識は彼をして自分自身の人生への認識、「人生も同じだから気をつけないと(終わってしまったらもう後

がないのが残念に思える)」(80)、に至らせる。しかしてサイモンは新しい自分、即ち自分の行為のすべてに意味があり、行為は自ら選びとるものであるり、ただ今現在の選択が自らの人生を築いていくものであると知った自分自身、として生き始める。これは単に生徒としてのサイモンの学業に対する姿勢が変化することにとどまらず、サイモンが自ら選ぶことができなかつた彼自身の現在の境遇、即ち母子家庭に育つた自分という条件およびそれが生じた原因であるところの父親の失踪、を自分自身の問題として新たに捉えなおす必要をも感じるのである。それはサイモンが新たに気付いた、一人の人間として自分の行為を選ぶというありかたと同じありかたの選択の結果として失踪を選んだ父親の生き方の再認識の必要性であり、父親と自分自身の関係を捉えなおしたうえで、与えられた条件としての母子家庭に育つた自分をここで新たに選びなおそうという意図であると考えられる。そのためには、小麦粉袋の世話をし始めた当初から気にかかっていた事柄、即ち彼の生後六週間で失踪した父親がサイモンの親として、また一人の人間としてどのような思いから失踪したのか、を探求する必要があると考え、その探求を始めるのである。

サイモンはこの時点以前にも父親の失踪に関心を持っていたことは、育児日誌第四日に明らかである。かつて父親がなぜ失踪したのかと母親に尋ねたところ、「いずれそうなることだった」(74) のであり、サイモンが原因だったのではない (74) という返答を得たというのである。サイモンの父親は、生後間もない赤ちゃんであったサイモンを「頭から落としたり、お風呂で顔を下に向けて浮いたままにして放っておいたりはしなかった」(74) ところから、父親としては「なかなかのものだった」(74) という評価を妻であるサイモンの母親から得ている。その父親がサイモンの生後六週間で失踪した事実に対してサイモンは「どうしてではなく、どんな風に」(75) いなくなったのかを知りたいというのである。具体的に「何か言ったのか、大もめにもめたのか、おばあちゃんもその場にいたのか」(75) といった状況を知りたい、知る権利がある、というのである。というのも、母親と父親の関係は修復不可能でもう終わり (76) だったのであり、父親も妻子とは終わりにした (75) のであり、何処かに行ってしまうと送金もせず、手紙も寄こさなかつた (75) のであるにしても、息子であるサイモンと父親とは終わりになっていない (75) からだというのである。そして父親が何を考えていたのか (77) を知りたいと思っているが故に、父親のことを考え、知りたいことがあり、どんな風に出ていったのかも知りたいことの一つ (75) なのだというのである。サイモンの切実な問いかけに対して母親は、それまで話したことのなかつた夫でありサイモンの父親失踪当日の朝から昼食までの様子を話し、「変わったことは何もなかつた、後になって考えても変わったことは何もなかつた」(76)、「何か事故でもあったのかと皆が思ったくらい」(76) に何も変わったことはなかつたのだと言うのである。しかし実際には、当日の午後、「大きな青い鞆を詰めて、裏側の窓からロープで下ろし」(76)、「門から出た時には何も持っていなかつた」(76) のであるから、後で「裏に回って鞆を持ってバス停に行ったに違いない、シカゴに行く最終バスの時刻をみはからって」(76)、という行動をとったらしいのである。しかし父親の様子は、まるで「ビールかチョコレートでも買いに行くのだと思った」(76) という身軽で、普段と変わらない様子だった

というのである。ここには父親が何を考え、どのような思いで出ていったのかを知る縁はないように見える。が母親はもう一点、「ポケットに手を入れて口笛を吹いていた」(76) ことも思い出している。この点をサイモンは重視して、「今のサイモンの年よりほんの少ししか上でない父親が、どこか違うところで人生をやりなおす時に何を考えていたのか」(77) を「知るヒントになるかもしれない」(77) として、父親が口笛で吹いていた曲が何であったのかを知りたがるのである。傍目には普段通りの様子と見えた父親が、隠し通した彼の心的状態を表現した唯一の行動としての口笛にサイモンは拘ったのである。今となっては唯一の手がかりである父親が吹いていた曲を知りたがるサイモンに対しての母親の答えは「覚えていない」(77) であり、サイモンはその曲が「“Faraway Roamer?” “Long and Lonesome Road?” “Goin’ to the City and Ain’t Never Comin’ Back?”」(77) のいずれかだったのだろうかかと自問する。

このように失踪時の父親にサイモンが拘る理由は、既に述べたように小麦粉袋の赤ちゃんを世話し始めてすぐ、初日の段階で既にサイモンが世話をする対象としての小麦粉袋に愛着を覚え、世話をする義務を果たさねばという責任感を覚えたことにある。サイモンの父親は六週間、1008時間でサイモンを見捨てて失踪したのであるが、サイモンのほうはプロジェクトの日にちが経過しても小麦粉袋に対する当初の気持ちは変わらず、むしろ思いは深まり、プロジェクト開始後11日には「学校中の皆がサイモンが小麦粉袋の赤ちゃんに夢中になっていることを知っていた」(86) ほどである。サイモン自身も彼の小麦粉袋を可愛く思い、心配りをし、話しかけ (86) るのである。このようなサイモンは、かつてのサイモンではないのである。プロジェクトが始まった当初には相反する二つの思い、即ち小麦粉袋への愛着・責任感と共に最終日の小麦粉袋の「大爆発」を心待ちにもしているという思い、を何の疑問も抱かずに併存させていたのであるが、第11日のサイモンは、彼の小麦粉袋を「大爆発に巻き込むのは忍びなくなってきた」(86) ののである。他の「Room 8」の生徒達は彼等の小麦粉袋を当初からおどなりに扱い、或いは目を離してはならないという規則を利用してベビーシッターを引き受けてお金儲けを企んだり (81)、果てはプロジェクト11日目の下校時に至っていつも穏やかな級友のロビンが、鞆の中を探って捜し物をしていた時に彼の小麦粉袋が泥のなかに落ちてしまい、破れかかっていた小麦粉袋の世話をし続けることに対して訳もなく癩癩をおこし (102)、彼の小麦粉袋を小川の汚い流れに蹴り込むこととなる (85)。ロビンに続いてウオレン、ウエイン、ジョージの3人も世話に疲れたことを理由に、それぞれ自分の小麦粉袋を小川に蹴り込んでしまうという事態になる (89)。しかしサイモンは、ロビンの「気持ちが分からない」(86) と言って、彼自身の小麦粉袋のボンネットをまっすぐになおしてやるという、細かい配慮をするのである。このようなサイモンにとっては彼の小麦粉袋を「大爆発に巻き込むのは何か尋常でない、何か恐ろしいことであり、まして小川に蹴り込むなどはもってのほか」(86) のことに思えるのである。このようなサイモンは四人の級友から見れば、小麦粉袋の世話で「おかしくなった」(90) ののである。しかして先に名前をあげた四人の級友達は実際に彼等の小麦粉袋の世話を放棄し、更には小川に蹴り込んで抹殺してしまうのである。加えて四人は小麦粉

袋の世話からは「何も学ばなかったし、誰かが赤ちゃんをみてくれない限りは赤ちゃんなんかいらぬ」(93)、「赤ちゃんがどれほど厄介なものかを知ってたら、誰も赤ちゃんなんか欲しがらぬ」(93)、「たまたま赤ちゃんができたとしたら、少しでもものが考えられる奴なら逃げ出すだろうよ」(93)という意見を述べる。これがかつて生後六週間で実際に父親に見捨てられたサイモンをいたく傷つける(93)。サイモンは、プロジェクトのなかでの役割としては小麦粉袋という赤ちゃんの世話をする父親であると同時に実際にかつて父親に放棄された赤ちゃんであるという、両面を兼ね備えた存在なのである。このサイモンにしか抱けない感慨は、「赤ちゃんとしての僕の何がいけなかったんだろう。父さんが一緒にいたい、育てたいと思わなかったのは僕の何がいけなかったんだろう。僕は小麦粉袋とは11日間しか一緒に暮らしていないけれど小川に蹴り込もうなんて思わない。何故父さんは出ていったんだろう、僕は本物(の赤ちゃんだった)なのに」(94)というものである。サイモンには失踪した父親が、赤ちゃんであったサイモンが嫌になって失踪したとは考えられず、納得できないのである。

サイモンは小麦粉袋の世話をすることで、親としての気持ちを育み始めているのであり、「11日前ならどれほど大勢の赤ちゃんがいても気にもならなかったのに、今は一人一人の赤ちゃんが気になる」(95)のである。彼の赤ちゃんに対するこの新しい関心は、一人の赤ちゃんとの出会いによって更に深い理解へと向かうことになる。その出会いとは、信号待ちをしていた時にすぐ目の前に母親の背中バックバックにおぼわれた赤ちゃんがいたことである。女の子とおぼしきその赤ちゃんのボンネットの結び紐が口元に上がっているのを見たサイモンが、紐をあごの下にもどしてあげようと指をのぼした時、「まるで魔法のよう」な効果が現れ(95)、「赤ちゃんの頭の中でまぶしい電球のスイッチが入ったかのよう」(95)に赤ちゃんの顔が「輝き」(95)、「笑みで顔が変わった」(95)というのである。サイモンの指一本が赤ちゃんにもたらした影響は、「何か信じられないような芸当でもしたか、耳から火花を出して三回宙返りをするといったような何か驚くようなことでもしたかのよう」(95)な効果であり、サイモンは彼の指の「力に酔って、指を揺り動かし」(96)て見せる。するとそれを見た赤ちゃんは「笑いの発作をおこして、バックバックのなかで身をよじった」(96)うえ、足を「蹴りあげ、喜びの声をあげる」(96)のである。サイモンは赤ちゃんについてはほとんど何も知らないながら、「かつてこれほど容易に、これほどまでに人を喜ばせたことがあったかどうか」(96)という満足を感じる一方で、彼の父親が「赤ちゃんの扱いが下手だったのかもしれない」(96)、また生後六週間だったサイモンも「あと数週間、あるいは数カ月で(大喜びした赤ちゃんのように)指一本を揺り動かすだけで最高の気分させてくれるようになることに思い至らなかった」(96)のかもしれないと残念に思うのである。サイモンにとっての赤ちゃんは、「他のどのようなものとも違って、なにか特別な存在」(95-96)で、「たとえどんなにつまらない奴でも、惨めな人生を送っていても、赤ちゃんはスターだと思ってくれるし、……、遠ざかる前にバックバックから落ちこちそうになりながら振り返って見る価値のあるものだと思ってくれる」(96)のだと思いつるのである。それゆえ人々が「赤ちゃんは素晴らしい」と言う時、それは「ふりでもな

く、新米の親達を励ますためでもなく」(97)、「彼等は本当にそう思っている」(97) のであり、「真実」(97) であると知るのである。サイモンの洞察はこれにとどまらず、「正常人なら、自分が赤ちゃんにしてやっていることにに対して赤ちゃんが十分に応えてくれないからといって腹を立てたりはしないものだ」(97) という深さにまで届くのである。また同時に、「人は厄介なもので、いつも何かをさせられていると思ったり、利用されていると思うものである」(97) ことにも気付いている。このような認識にまで到達したサイモンは、彼の赤ちゃんである小麦粉袋を可愛く思い、最終的に「きみが本物の赤ちゃんでも僕はいいと思っているよ。もっと手間がかかっても、大声で泣いても、おむつを度々汚しても、お店で大騒動を繰り返していても、僕は気にしないよ」(99)、そして「僕はたいしてものを知ってるわけじゃないけど、これだけは確かだからね。(小川に蹴り込むようなことは)しないからね。絶対に、絶対に、絶対に」(102) と小麦粉袋に話しかけるのである。小麦粉袋は疑似赤ちゃんであり、その世話をするサイモンが体験しているのは疑似親としてのものである。がここにサイモンは自分自身の裡にある人間性としての赤ちゃんという弱者を守ろうとする意志と本能と共に、赤ちゃんという無垢で純粋な存在が親や大人にもたらず無償の喜びを、体験的に実感することで自分自身が有している意志や感情を新たに知るのである。この体験はサイモン自身に関する発見にとどまらず、彼の母親が十四年余も毎日休みなく息子であるサイモンの心身に気を配って、愛情深く、忍耐強く育ててくれたという事実を偉業であると認識させるのである(126、170、171)。サイモンがこのような自己にまつわる、また母親に関する発見を体験している一方で、他の級友達は相変わらず彼等の小麦粉袋を面倒なもの(104)、厄介なもの(105、110)、小遣い稼ぎのもと(107)としか見ていないのである。また小麦粉袋の世話から本物の赤ちゃんに注目する生徒もいるが、小麦粉袋に対すると同様、或いは小麦粉袋よりももっと世話に手が掛かることに注目するばかりである(110-112)。更に自分達が父親になることには悲観的であり否定的であり(113)、またその前段階としての女性との関係についても赤ちゃんの父親にならぬように注意深くいなければならない(113-114)、さもないと人生を自分の好きなように生きられない(114)、と口々に意見を述べる。

級友達が上記のような否定的感想を小麦粉袋と赤ちゃんに対して述べている間、級友達とは異なる体験と発見をしていたサイモンの関心事は、失踪した父親の思いはどのようなものであったのか、そしてそれを知る縁となるであろう父親が口笛で吹いていた曲、であった。何を考え込んでいるのかとクラス担当のキャシディ先生がサイモンに尋ね、サイモンが曲名を知りたいと答えた後、先生は単にサイモンに考えるのをやめさせるために口からでませに、しかし自信をもって「“Sail Away”」(118) という曲目を教える。事実そうであったのかどうかは不明であるが、サイモンはその答えに納得し、その歌の歌詞を知ろうと母親に尋ねるが、母親は初めの二行しか思い出せず(120)、母親の友人に尋ねて続く二行を(122)、隣人に尋ねて続く三行を(123) なんとか知ることができるのであるが、最後の二行分は分からぬまま翌日登校する。教員用の通学路をアーノット先生と歩きながら大きな声で“Sail Away”⁵ を、歌詞が分かった箇所まで歌い、その後が分からないまま歌

えないでいると、サイモンの歌声を教員室で聞いていたキャシディ先生が、サイモンの歌声が続いてこないのに苛立ってその続きを歌ってくれるのである(131)。こうしてサイモンは父親が失踪時に吹いていた曲の歌詞を、それはそのまま父親の当時の気持ちであると思われる言葉を、全て知ったことになるのである。その歌は、船乗りが、船出するによい風が吹く時期がきたので船の帆をあげて、愛する者達の幸せを願いながらも彼等をおいて、船出するというものである。サイモンの父親が実際に吹いていた曲は依然分からないままであるが、サイモンにとってその「船乗りの歌」(138)は記憶にもない父親が失踪時に吹くにふさわしい曲に思えたのである。しかしてサイモンは歌詞のなかで理解できない箇所、“My heart's a tall ship, and high winds are near”、を同学年の秀才に廊下で尋ねる(133-136)。彼の説明は、「その男は行かねばならなかった、ということ。帆を張った船は船出しなければならぬように、彼もまた、どれほどとどまりたいと思っても、性格的・本能的に出て行かなければならない。彼には選択の余地がない」という内容である(135)という解釈であった。この説明にサイモンは父親の失踪の原因が赤ちゃんであったサイモンにあるのではなく、父親の意志でもなく、選択の余地も無く、父親は妻と子供と共に生活したかったかもしれないがどこか他所に行くしかなかったのだと心から納得するのである(136)。こうしてサイモンは父親を一人の人間として理解しえたのである。

以上のような経緯を経た後、小麦粉袋プロジェクトは当初の予定であった3週間を待たずに第18日で終了することになり、生徒達は小麦粉袋をクラス担当のキャシディ先生に返却することになる。生徒達が期待していた最後の「小麦粉袋の大爆発」はサイモンの誤解であったことが判明してサイモンは窮地に陥るが、「Room 8」の生徒達は次々袋を返却し、キャシディ先生はそれらを黒いゴミ袋に入れていく。が、サイモンは彼の小麦粉袋赤ちゃんとどうしても別れがたく、先生がゴミ袋に放り込んだ瞬間に受けとめてスエットシャツの下に隠し持ち、机の中に安全に隠す。その後、育児日誌を最終日分までしあげる課題をクラスでしている間、見回っていたキャシディ先生がサイモンの日誌に涙が落ちているのに気づき、彼が書いている日誌を読む。日誌には、「何日も前から、そして小麦粉袋を好きになってしまった今、ことに（「大爆発」が誤解であったことから）級友が皆僕を嫌って、友達が一人もいなくなった今、僕の小麦粉袋を傷つけることはできない」(154)と書かれていた。続けてサイモンが書いたのは、サイモンが彼の小麦粉袋をあやしている様子を見た彼の母親が、誰とは敢えて言わないながら、ある人を思い出すと言ったことから、父親がサイモンをあやしていたことが分かって嬉しいこと、父親は彼なりにサイモンを愛していたのだろうにそうと表現するのが下手だったのだと思う(155-156)、ということであった。サイモンは嫌われて見捨てられたのではなく、彼の父親の生き方と妻子の存在とが合致しなかっただけである、との客観的認識に達していることが明らかにされている。この認識は後に、大切なのは、自分のことを知らない父親ではなく、自分を知っていてくれる人達なのだ(173)に至り、自分は人間として「自由なのだ」(173)という感慨に至るのである。このようなサイモンに対して先生は、小麦粉袋を家に持ち帰る許可を与え、さらにサイモンは「他の生徒達よりも良い父親になる」(156)と言うのである。が失

踪した父親の息子であるサイモンとしては、父親の性格を受け継いでいるのかもしれないという漠とした思いがあり、親になるということは、子供を可愛いと思う、好きになるという罠に陥ることであり、何も知らないでその罠にかかって、そうと知った時には遅すぎる (171) という考えが浮かぶ。そして彼の小麦粉袋を本当に可愛く思い、好きになったことを認めるが (174)、同時に小麦粉袋は疑似赤ちゃんであること (174)、それゆえに本当の親-子の関係ではないこと (174)、彼はまだ自由であること (174)、本物の父親になるのはまだ何年も先 (175) であり、そうなる時にはいい父親になる (175) という考えに救われた思いになる。しかして校舎の外に運び出すようにと言われた小麦粉袋の入ったゴミ袋から一つまた一つと小麦粉袋を取り出しては蹴り破り (175-176)、“Sail Away” を歌いながら遅刻したクラスへと戻っていくのである (177)。ここには親であることの重責を理解し、納得し、またそれを自ら引き受けることを決意した少年の姿がある。親であることは、単に男性と女性が妊娠と出産を契機にして、偶然その立場に身をおくというだけでは十全な親になることはできないものであり、人は自分の人生を一人自分だけのものとして生きることでもできるところを、親は子の存在をも自分の人生に取り込むかたちで責任を負うものである、同時に親も子も自由な個人として生きるものである、ということをサイモンは承知したがゆえに、本物の親になる時期を彼自身が十分に責任を負える時が来るまでのばせることに安堵したのである。

3.

サイモンの自己発見は、学校での生徒としてのありかたを見直すことで自ら選択し行為することが生きることであるという認識に端を発し、親として赤ちゃんの存在をどう受け止めるかを考えさせられるなかで赤ちゃんに対する彼自身の愛着や責任感を発見し、そのことで彼の失踪した父親の気持ちを推察すると共に「見捨てられた赤ちゃんであったサイモン」自身の存在を新たに受け止めなおして「失踪した父親を理解したサイモン」として生き始めるまでの過程に起きた出来事である。サイモンが言うように「新しく生まれ変わる」には、当人の心の奥深くでの感動がなければならない。この契機となる出来事がサイモンの場合は小麦粉袋を赤ちゃんに見立てた3週間のプロジェクトであった。「新しく生まれ変わる」契機となる出来事は、人それぞれに異なる。現実の日本社会のなかでの出来事としては、例えば、8月10日付けと9月21日付けの朝日新聞投書欄に載った高校生の投書が好例である。前者は、犬を飼い始めてから犬と共に暮らす体験を実感したことで、その体験を共有しているという共通点ゆえに、他の飼い主達への理解が深まり、気軽に話ができるようになったこと⁶。後者は、ある日思い立って夕食を作ることにし、母親に手伝ってもらってなんとか準備ができ、父親、姉、兄が帰るのを待っていたところ、夕食はいらぬとの連絡が3人から入って、がっかりしたのだが、これ迄本人が何度母親ががっかりさせてきたか分かったというのである⁷。これらの投書をした若者達は日常の些細な事柄のなかに想像力を働かせることで「新しく生まれ変わる」体験をしたのである。彼等は自己発見と共に自己のなかに他者を見つけ、自己を生きることは他者を生きる事、自分

を愛する事は他者を愛する事、人は自由でありその自由は他者の自由でもあること、を確かに知ったのである。この自己発見は一に日常の出来事に留まらず、彼等の生き方を根底から変える、人生大事の出来事である。ここには自己発見が「自己教育」、即ち「意図的な能動的な教育体験」と「受動的な教育体験」の両者が「一つになっているのが自己教育の体験である」⁸とされているように、先の投書をした二人の若者達は自分自身で体感することで学んだのである。サイモンの自己発見の意味が国を超え、時代を超え、状況を超えて若者達の心を日々とらえ続けていると知ること、この作品の意義を確認するものである。

加えてこの作品が中学校を舞台にしていることから生徒-教師の関係についても示唆深い点が見られる。サイモンが「新しく生まれ変わる」契機となったところの生徒が見た教師の人間的質、すなわち教育に対する「気概、強靱な心、強い決意を持続させる」、は現実の教育の場において大切であり、それを失った教師を生徒達は敏感に察知するものである⁹。また教員は自分では予想もしない影響を生徒に与えるものであることがディヴォイ博士の誉め言葉¹⁰、キャンディ先生がでまかせに教えた歌の題名の例に見られる¹¹。賛否は分かれるところであるが、やはり教師は教場にある時だけが教師ではないこと、生徒にとっては教師の個人としてのありかた・生き方そのものが教師として影響を及ぼすものであることを心に銘じるべき例である¹²。さらにもう一点、教師は自分の生徒把握・理解に限界があることを知るべき例として、サイモンが生徒としてのありかたを自ら選びとったことが彼にもたらした変化の原因を理解しえなかったアーノット先生の例に加えて、サイモンは説明するよりは黙って居残りの罰を受ける方がいい(169)とする生徒であることをあげる。生徒の行動の背後にある心を理解するために、教師には深い心が求められる所以であろう¹³。一人の中学生の18日間を描いた作品は、また生徒に関わる教師達の18日間を、更にはいわずもがなであるが家族の18日間も描いているという意味で、この作品が中学生を中心とする若者達だけでなく、彼等の家族や教師にとっても、それぞれに意義深い作品として読まれる意味があると思えるのである。

注

- 1 「愛の場所」 p.27
- 2 サルトル、ジャン・ポール「実存主義とは何か」 p.18
- 3 同上 p.13
- 4 同上 p.22
- 5 “Sail Away”の歌詞は以下のようなものである。
“Unfurl the sail, lads, and let the winds find me—
Breasting the soft, sunny, blue rising main—
Sail for a sunrise that burns with new maybes,
Farewell, my loved ones—
and be of good cheer,
Others may settle to dandle their babies—
My heart's a tall ship, and high winds are near.”

- 6 朝日新聞、朝刊投書欄 8月10日
- 7 同上 9月21日
- 8 「愛の場所」 p.13
- 9 Flour Babies に生徒達の観察力・察知の能力の鋭さを示す好例がある。アーノット先生が厄介事が生じる度にアスピリンを飲むのであるが、その頻度、服用量の増加をサイモンは見逃さず、アスピリン依存が彼女の弱点であり、自己管理能力の喪失を示している（169-170）と看破し、このような状態なら教員を辞めるのもそう速くない（170）とみるのである。
生徒の教師観について、「人間関係と生徒指導」(p.88-p.90)によると、感情的態度の特性の領域が中核となって生徒は教師を認知しているというのだが、加えて教師の指導行動が生徒の教師認知に影響を及ぼすともしているのがこの点に照合すると思われる。
- 10 褒め言葉の効用に関しては、「も」と「しか」、「しか」と「なら」といった助詞の使用が大きな印象の違いにつながるものが「心をささえる生徒指導」(p.30-p.32)にある。また「否定-否定」で次の課題を示すより、前進にむけての励ましの表現をとると効果的である事（同上 p.32）が書かれている。
- 11 加えて小麦粉袋プロジェクトの規則にあった監視者を実際は置かなかったのであるが、生徒達はプロジェクトの期間中たえず監視者の存在を意識し続けていたのである。
- 12 「生徒（活）指導を「生き方の指導」ととらえる宮坂は、「生活指導は、学習指導とともに学校教育を成り立たせる基本的な昨日にはほかならない。両者は、教科と教科外をとわず、およそ教師と子どもが接触する限りすべての場において行われうる教育的な機能にはほかならない。」「心をささえる生徒指導」 p.18
- 13 教師の生徒観についても「人間関係と生徒指導」(p.90-p.95)に、教師から肯定的な評価を受ける生徒は、教師が望ましいと認知している生徒である、との結果がある。それゆえに、教師は「常にコミュニケーションのチャンネルを開き受容的な態度で接することが大切であろう」(同上 p.95)としている。

参考文献

- Fine, Anne Flour Babies. Boston: Little, Brown and Company, 1992
福屋武人編「人間関係と生徒指導」東京：学術図書出版社、1991年
原田信之〔編著〕「心をささえる生徒指導」東京：ミネルヴァ書房、2003年
三井 浩「愛の場所」東京：玉川大学出版部、1976年
サルトル、ジャン・ポール 伊吹武彦訳、東京：人文書院、1977年